

ハンガリーへ 青年海外協力隊柔道隊員として。。。

私は、沖縄出身、二十六歳、新垣琢也といいます。

2002年7月から、2004年9月まで、東欧はハンガリーという国で、青年海外協力隊・柔道隊員として、二年二ヶ月間活動してきました。

私は、二度目で合格できる事が出来ました。私が外国人柔道へ興味を持ち始めたのは、少年の頃に見た、世界選手権やオリンピックでした。日本選手の華麗な技も目に付きましたが、それより外国人選手の何もあそこまで強引に人を投げなくても、もっと賢く人をなげればいいのに、と何も深い考えもなく、外国人の柔道に興味を持ち始めました。

それから、私自身、大学卒業まで日本で稽古を積んできましたが、やはり外国人柔道への憧れや興味は捨てきれませんでした。海外で柔道をしてみたい、しかし、私には実力的にそんな力はない。。 どうしたらいいだろうと悩みました。。

そこで、先輩の誘いもあり、大学の校舎にはポスターもあり、私の望みの条件をすべて叶えてくれそうな、青年海外協力隊です。これだっ！と思い、早速応募しました、前述した通り二度目で合格できました。一度目の失敗で諦めかけたのですが、ポスターやCMなどを見るたびに、諦めるのか？という自問自答を繰り返しました。結果、第一希望のハンガリーに合格し、今の自分がいます。

これから、少しこの二年二ヶ月間におきた出来事や、感動した事や、勉強になった事などを書きたいと思います。

私の住んでいた町は、ソンバトヘイという町で、人口10万人程度の中都市であり、それほど田舎でなく、オーストリアとの国境沿いという事もあり、町自体明るくヨーロッパ？！な感じな町でした。私は日本人ですが、沖縄人ということもあり、現地の人からは中国人？日本人？えっ？何人？というふうな感じで見られていたのを覚えています。

私が赴任した時に、配属先と前任者と現地の町新聞に載った事をきっかけに、あいつは柔道の先生だっ！と認識されてきました。ハンガリーのソンバトヘイという、郊外の小さな町の人たちでも、‘JUDO’は知られているのです。私は何度‘JUDO’に助けられたかわかりません。私の人生自体そうなのですが・・・。

それから、私はこの町で柔道を教える事になるわけですが、私には、二人の相棒がいました。男・69歳と、男・44歳でした。69歳の男はとても親日的で柔道が大好きで、日本へ行ったことは無いのですが、本やテレビなどで日本の事を学び、日本人的な考え方や思いなどを実践したいと考える男でした。

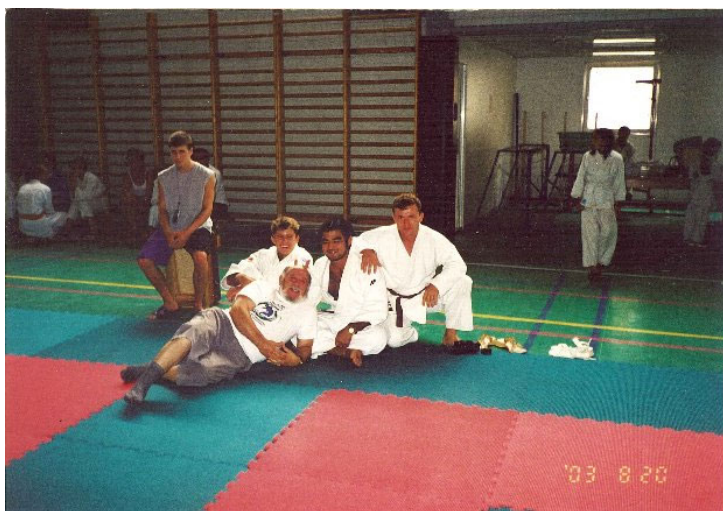
もう一人は、ビジネスマン。スポーツをビジネスにしたい、JUDOをビジネスに！！と考える自営業者でした。この二人は、とても対照的なのですが、とても釣り合っていて、利害関係が一致してしまっていて、その間にいた私としては、人間関係やチームの運営など雑務は一切考えることなく、ただ柔道を教えさえしていればよかったです。

しかし、ある日69歳のパリバーチは、この日に限り柔道着を着て、この日に限り体育館を走り、この日に限り柔道着姿で稽古してるところを私たちに見せてくれました。

しかし、その直後、畳の上で心臓発作で死んでしまいました。私には死に場所を選んだと

しか思えない、パリの死に様でした。最後の彼の姿は、少し小さめの柔道着姿の白帯でした。

彼の死により、44歳・トニーと私の二人三脚のJUDO普及活動が始まりました。前述したとおり、トニーはビジネスマンで、日本がそんなに好きでもなく、柔道なんてしたこともないし、見る事もそんなに好きでもない男でした。私はこれから先、どうなるのだろうと不安でしたが、柔道着さえ着ていれば、柔道の練習さえしていれば、柔道を好きでさえいけば、という気持ちを貫き通しました。トニーとは何度も何度もぶつかりましたが、お互いの意見を尊重し、お互いの立場に立ち、歩み寄る事で、お互いの関係を今でも続けていけていると思います。今でも電話はくるし、絶対に日本へ、タクヤの居る沖縄へ行く！と言ってくれています。本当に本当に分らず屋の男でしたが、本当は心の温かさはパリに匹敵するほどではないかと思っています。



(コーチ、選手と共に)

私の活動先には、当初柔道着も無く、畳もない状態でした。そこで、父を通し地元である沖縄へ援助をお願いした所、古柔道着約35着が届き、フル活用させていただきました。これからやっと柔道が出来ると思いました。あの時は本当に嬉しかったです。柔道着を見た子供達の目は輝いていました。全日本柔道連盟、沖縄県柔道連盟の先生方のご理解とご協力に本当に再度感謝いたします。本当にありがとうございました。

私の教えていたチームは、六歳から十八歳の男女三十人程で週三回の練習でした、一回の練習で二時間も続かない子供達でしたが、徐々に力を付けていきました。最終的に残った子供達は初めの頃は興味津々で沢山集まった全員白帯から始めた子供達ですが、強い相手には向かっていき、弱い相手には相手の事を思い、綺麗に投げる事を基本とし、時には投げられてあげる事もできるようになりました。柔道で学んだ事を忘れずに社会に出ても頑張りたいです。出来れば柔道も長く続けて欲しいです。

私の活動はソンバトヘイで子供達に柔道を教えてチームを運営していくことがメインでしたが、それだけでは自分自身、納得のいく二年間になる事はないだろうと思ひ、少しの情

報と道着を持って自分の足で道場を探し、ハンガリーにいる柔道家たちと汗を流す事を望み、それを実践しました。最初は片言のハンガリー語で、「私は日本人です。私は柔道の練習がしたいです。」で始まりましたが、最終的には、私の少年少女柔道クラブ、小学校授業での柔道指導、地方の少年少女柔道クラブ、近隣諸国柔道クラブの合宿、ハンガリージュニアチーム合宿の技術コーチとしての参加、ハンガリーナショナルチームの合宿、などなど色んな所で柔道を出来る事が出来ました。指導は主に少年少女。ナショナルチームとは、一緒に練習させてください！という形を取りました。それが結果的によかったです。このように、一つの小さな地方の弱小チームの監督が、広範囲に活動できたのは、もちろん一人の力だけでなく、ハンガリー青年海外協力隊事務所や、OB柔道隊員である中神尚人さんや、現隊員の太田一世さんなどの協力があったからだと思っています。本当にありがとうございます。

また、私自身出場可能な試合には積極的に参加しました。根拠は、私の教えている少年少女柔道クラブ（全員白帯）に見せるために、私が試合に出る事により、試合に対する気持ちや勝ち方などを私からでも学んでくれ！と考えた事と、やはり自分自身ハンガリー人に負けてたまるかっ！と考えたからです。

活動終了間際になると、私の白帯集団が地方の大会ではあるのですが、ちらほらとメダルを取る事が出来るようになりました。私自身も監督として、最初の頃は、試合中に応援をする事も慰める事も、出来なかったのですが、私がハンガリーで監督として最後の試合では、私のアドバイスで相手を投げ、私の言葉で笑い、そして泣きました。私も彼らの行動や言動によって、涙する事が出来ました。私の活動の仕方、活動への考え方、などが間違っていなかったと思える瞬間でもありました。子供達から学べた事に感謝したいと思いました。



(合宿での1コマ。中神氏、太田氏と共に。)

活動終了後、ハンガリー柔道連盟会長・トゥチ・ラスロー氏より、感謝状をいただきました。私の活動は間違っていなかったと再確認でき、本当に良かったです。

では、まとめに入りたいと思います。

ハンガリーはご存知の通り、EUの加盟国となり、もう発展途上国ではない国と言ってもおかしくないでしょう。日本からの援助を受ける国なのか?! 私たち協力隊隊員自身、とても難しい問題で、わからない事なのですが、一つ言えることは、日本の柔道家から、世界のJUDO家は学ぶ事を望んでいると思います。現に、アテネでの日本選手団の活躍! 私自身、本当に日本人でよかったと思いました。ハンガリーがどうこうという話でなく、世界中のJUDO家達が柔道家になりたいと思っています。私は、ヨーロッパJUDOが好きでした、今でも好きです。しかし、「ハンガリーに柔道を教えに行って、学んだ事は?」と聞かれると、「やはり日本の柔道が最強ですね。」と答えます。それは世界の柔道家のみなさんが思っていることだと思います。

最後に、親を初め、恩師である沖縄尚学の真喜志先生、講道館と全日本柔道連盟の先生方、沖縄県柔道連盟の先生方、JICAの関係者の皆さん、私がハンガリー行きを決心した時の助言や、活動期間中のご支援、ご声援大変ありがとうございました。またこれからも柔道人生を歩みたいと思っております。これからもご指導よろしくおねがいします。

ハンガリーの子供達に、最後に「感謝!」と書いた色紙をプレゼントしました。私も「クスヌム!」(ありがとう)という言葉を一生涯忘れないようにして、大人になった彼らに「クスヌム!」といいたいです。

以上

新垣琢也(あらかきたくや)

青年海外協力隊員としてハンガリーへ(2002年7月~2004年9月)

福岡大卒、講道館柔道四段

沖縄尚学教員

昭和53年8月29日生